

附属坂戸高等学校におけるオリンピック・パラリンピック教育の実践

附属坂戸高等学校 藤原 亮治

本校は2014年度より、文部科学省からSGHの指定を受け、グローバル社会に資する人材を育成する教育実践の重点活動として「オリンピック・パラリンピック教育」を位置づけ、学年全体で取り組んでいる。前年度の活動から発展したことや新たに加わった活動についていくつか紹介する。

筑波大学附属坂戸高等学校 オリンピック・パラリンピック教育年間指導計画(2016:体育科・福祉科関連分)

学年	教科	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
1学年	LHR 産業社会と人間	特別支援学校との交流学習 クラスごとで年一回附属または近隣の特別支援学校と交流												
	体育	「バレーボールI」 ハンドリング確認ゲーム「シングリングバレーボール」 カバリングスキル向上ゲーム「ペンボール」						持久走 オリンピックとの有酸素能力比較						
2学年	自由選択科目 体育を科学する	ICTを用いて「バイオメカニクス」 50m走・ハンドボール				共同学習 事前指導	スポーツ交流I in大塚	ボランティア学習事前指導 アダプテッドスポーツ体験学習	アダプテッドスポーツ を考えようI	スポーツ交流学習II in坂戸	スポーツ交流学習III in筑波			
	自由選択科目 福祉援助技術	「バレーボールII」 簡易ゲーム「レクリエーションバレーボール」				知的障害とは		障害者スポーツ ボランティア学習		アダプテッドスポーツを 考えようII				
3年次	体育 体育理論							アダプテッドスポーツにチャレンジ フライングサッカー・ゴールボール オリンピックの記録と技術の関係	持久走 地域スポーツへの参画に関する準備					
	課外活動・行事							パラリンピックを変えるテクノロジー 共生社会シンポジウム ブース運営	地域のスポーツ行事参加 校内マラソン大会 with 坂戸チャリティマラソン	ニュースポーツにチャレンジ アルティメット・インディアカ ・ネオホッケー	クワベルタン 和崎治五郎 ユースフォーラム	青年学級交流	青年学級交流	

1) 特別支援学校とのスポーツ交流学習 (体育科・福祉科)

本単元は様々な体験・交流学習をもとに「日本における障害者と健常者についての心のバリアフリーに関する課題」の解決について学習した。それぞれの授業の目標は以下のとおりである。

- 「体育を科学する」 スポーツの有する個人的・社会的に豊かな価値を理解し、それら活動を主体的に行う・支える・観る資質についてスポーツを科学する視点から身につける。
- 「介護福祉基礎」 援助が必要な人が“地域”で生活を送ることを考える。知識及びその技術を学習し、適切に行う能力と態度を身につける。

1学期はそれぞれの科目で基礎的な知識・スキルを学び、2学期に協働単位として「パラリンピック教育」を設定した。

単元の目的 パラリンピックが開催されることの意義について理解するとともに、日本で行われている障害者スポーツへの理解を深める。また健常者と障害者がノンバーバルな社会環境を築くために、

- (体育を科学する) スポーツがどのような価値を有しているかについて考える。
- (福祉援助技術) 現在の障害者と健常者を取り巻く社会環境について理解を深め改善を考える。

筑波大学附属大塚特別支援学校の生徒(以下「大塚生」と)8月25日(水)26日(木)と11月11日(金)、12月17日(金)の計4日交流を行った。障がいなどの多様さを認め包含していくことは、自分が所属する集団の中にある多様さを認めることの延長線上にある。昨年の活動が協働性・共同性の活動であった反省から、今年度はよりそれぞれの専門性を活かせる形で行った。そうした活動を通じて、ある生徒が「今までは“障害者”という線の色が濃かったが、交流を通して段々と薄くなっていった」と述べたように、自分が所属している集団とは別の集団として障がい者がいるという認識ではなく、同じ集団(社会)のなかに障がい者もいるという認識を得ることができた。



アダプテッド・スポーツ開発会議



考案スポーツ「クワッドゴールボール」



全ての交流を終えて記念撮影

2) ドイツヘッセン州スポーツユエグントの学生とスポーツ・ディスカッション交流 (体育科・英語科)

体育協会の日独交流プログラムに本校が協力する形で行われました。スポーツを多面的に捉え、その価値と活用について探

